

# オルセーのパトロンたち

*Legs Caillebotte Gustave, 1894*

*Musée d'Orsay*

*Impressionnistes*  
Première exposition de l'Impressionnisme

# オルセーのパトロンたち

## Legs Caillebotte Gustave,1894



オルセー美術館は、リュクサンブール宮殿(当時の近代美術館)からジュード・ポームやルーヴル美術館に散逸していた印象派絵画を一堂に集め、1900年に開催されたパリ万国博覧会の終着駅オルセー駅を改装し、時の大統領ミッテラン構想で1986年に誕生し、年間集客数300万人を超える世界屈指の美術館ではあるが、しかしそれは、国以外に幾多のパトロンたちに支えられていた・・・

パリのシャルル・グレイル(Charles-Gleyre)の画塾は、[ルノワール](#)、[モネ](#)や[シスレー](#)にバジールらが学び、画家の画材道具も改良され、1840年に発明されたチューブ入り絵具によって、野外に持ち出せる道具になり、時に彼らは写生に出かけ、あの光のマチエールを創り上げ、後の世に人々を魅了し続ける絵画史上に燦然と輝く[印象派](#)が産声を上げる・・・

[フレデリック・バジール](#) : Frédéric Bazille(1841~1870年)とは・・・

フランス南部の都市モンペリエでワイン製造を営む裕福な名家の子として生まれ、医者になる為に1862年パリにやってくるが、医学試験に失敗、絵画に専念する決意を固め、セザンヌにピサロやギヨマンなどと友情を深め、1865年サン・ジェルマン・デ・プレ教会近くのフルスタンバール通りにアトリエを借り、モネと共同生活し、「草上の昼食」にモデルとして登場している。1867年にはルノワールが同居し、実家からの仕送りをもとに、パトロンのように貧乏な画学生を援助し、新たな絵画の時代を夢見ながらも、1870年の普仏戦争に志願し、ビュルギュンディ地方ボヌ・ラ・ロランドで、享年29歳で戦場の露と消えた・・・

この時代・・・

パリでは帝政と共和政が行きつ戻りつ、時代の力点は、旧体制の帝政と新体制の資本市民の駆け引きが続き、1870年のフランスとプロイセン王国の[普仏戦争](#)は、ドイツ諸邦・ビスマルクをも巻き込み、プロイセン側の圧倒的勝利に終わり、開戦からわずか1ヵ月半で、フランスのナポレオン3世は10万の将兵とともに投降し捕虜となり、1871年首都パリは占領される。パリの住民が組織した抗戦団体・パリ・コミューンも鎮圧され、プロイセン王ヴィルヘルム1世はヴェルサイユ宮殿で盛大な戴冠式を行い、ドイツ帝国が成立し、フランスの第二帝政は終焉し、第三共和政に移行する・・・

そして、当時のサロン(官展)は写実を旨とし、格調高く、丹念に描き込む、[アングル](#)の新古典主義の後の[ドラクロワ](#)のロマ

ン主義が並存する時代で、この時代、肖像画を描くことが一つのステイタスであり、特に中産階級がのぞむ肖像画が絵画市場の産業として確立し、画家の収入源となっていた。しかしそれは、商売に徹し、見せかけの絵となり、又、絵具を作成する技術が画家の個性の一つであった時代から、誰でもチューブ絵具で、きれいな色を表現できるようになり、よりいっそう画家の没個性化が進んだ・・・

しかも、その肖像画市場に写真が登場し、写真家ナダールの様に肖像写真家が生まれる。写真の歴史は、1825年にニセフォール・ニエプスが撮影した「馬引く男：Un cheval et son conducteur」から始まり、当時には格段の技術進化をとげ、中産階級がのぞむ肖像画の需要をのみ込み、当時の画家から、肖像画市場を奪い取って行った・・・

時に、ジャポニスム:Japonismeがヨーロッパを包み込み、1878年パリ万博にはヨーロッパ中を巻き込みながら、大きな美の潮流を創り出し「浮世絵」の自由な空間表現が、生れ出ようとする印象派に多大な影響を与えた。それは当時のロマン主義に対抗したギュスターヴ・クールベが主張する写実主義の「絵画は写実的でなければならない」とする制約を取り除き、写実写真は任せ、人の手で描かなければあり得ない「美の表現」へと移行し、絵画と写真の棲み分けが生まれだす・・・そして、普仏戦争で[第三共和政](#)が成立し、自由主義的改革の進展で、個性を重要視する「個」が目覚め「美」の意味も大きく変わり出した・・・

[写真家ナダール](#)：Nadarは・・・

本名ガスパール＝フェリックス・トゥールナション：Gaspard-Felix Toumachon(1820年～1910年)は、パリの書店主・出版業者の子として生まれ、1837年の父の死後は、生活は極めて厳しく、さまざまな注文に応じて小説や戯画家として活動し1851年～1854年に完成した、当時の重要人物300人以上を描いた風刺肖像画シリーズ「パンテオン・ナダール」で名声を高める。その後、新技術である写真による肖像の探求に打ち込む為、サン・ラザール街にある建物に移転する。1858年、彼は気球で世界初の空中撮影を行い、真上からのパリ市街の写真に人々は非常に驚き、いまだかつて見た事も無いアングルが絵画にも大きな影響を与える。1860年にはスタジオをキャプシーヌ大通りに移し、シャルル・ボードレー、サラ・ベルナール、フランツ・リスト、ジョルジュ・サンドなど第二帝政期当時のフランスの主だった文化人、政治家、軍人、君主などを撮影し、肖像写真家として一世を風靡する・・・

普仏戦争後の1874年、ナダールはキャプシーヌ大通りのスタジオを、サロンに落選組のモネ、ドガ、ルノワールらの画家たちに展覧会の会場として貸し、シャリヴァリ誌の批評家レイ・ルロワが作品群を酷評し、モネの「印象・日の出」の作品から「印象派：[Impressionistes](#)」と呼ばれる、第1回印象派展：[Première exposition de l'Impressionisme](#)が産声をあげる。そして、皮肉にも写真家のスタジオで、写真と絵画の棲み分けが始まりだす・・・

その展示会を訪れたギュスターヴ・カイユボットは全く新しい世界を目にし、深く感動する。そして、大赤字の第2回印象派展に手を差しのべ、開催の費用を提供し、自らも第2回と3、4、5、7回に自作を出品し、売れない絵を買い取り、彼らの生活を事実上支援する。特に貧乏であったルノワールとは親交が深く「[ムーランドウ・ラ・ギャレット](#)」を買い取り、[自画像の中にそれを描いたり](#)、友人をモデルに描いた作品として有名な「[船遊びの人々の昼食](#)」では、右手前の帽子をかぶった男性で登場している・・・

[ギュスターヴ・カイユボット](#)：Gustave Caillebotte(1848年～1894年)とは・・・

富裕な衣料製造業者の子として、パリ10区のフォーブル・サン・ドニ通り(Rue du Faubourg-Saint-Denis)に生まれ、のち8区のマルゼルブ大通りのパリきっての高級住宅街に移り住む。1870年に法律学校を卒業して法律免許を得、[レオン・ボナ](#)の画塾に通い、1873年パリ国立美術学校に入学し1874年にはドガ、モネ、ルノワールらを知る。1875年の官展に「床削りの人々」を持ち込んだが、拒否され、1878年(30歳)に分割相続した家産により画業に専念。モネ、ルノワール、ピサロ、シスレー、ドガ、セザンヌらの作品を買うなどして、画家たちを経済的に助け、33歳の1881年、パリ西北郊セーヌ河畔の[プチ・ジユヌヴィリエ](#)(Petit-Gennevilliers)に敷地を求め、1888年に永住し、園芸、ヨット作り、切手収集などに凝り、ルノワールが繁く訪れ、[ジヴェルニー](#)の温室で、モネと蘭を育てたが、1894年、園芸作業中に肺鬱血により没し、45歳の若さでパリで最も有名な[パール・ラシェーズ墓地](#)に眠る・・・

カイユボットは生前、印象派を支えるために、多くの印象派絵画を買い支え、そのコレクションを、遺言により国家に遺贈する。彼は遺言状の中で、作品は「リュクサンブール(当時の近代美術館)」へ収めるようにと明記されていた。ルノワールと弟のマルシアル・カイユボットが遺言執行人とし、国との交渉が行われ、新聞にも大々的に賛否両論が書き立てられ、パリ市民に大きな波紋を投げかけ、コレクションの買い取りを求める運動が起きる。そして、2年間の折衝の後、ついに国家

が全面的に受け入れて、1896年にカイユボットの68点のコレクションのうち38点が選ばれて、リュクサンブール美術館で公開された。以後フランス政府は、このカイユボット・コレクションを種に、散逸しかけていた印象派絵画の収集に徐々に乗り出し、市民コレクターたちの大小様々な遺贈のコーナーが出来、印象派を中心とした、現在のオルセー美術館の膨大なコレクションのもととなった・・・

「名画」とは、技術の進化に異文化の融合、街やそこに住む人々、そして時代が創り上げた「美」の遺産とすれば、それを「風」に見事にキャンパスに定着させた人を「画人」と呼ぶのかもしれない、が、それらを援助し保存した人々によって「今」が存在する・・・

オルセー美術館では、彼に深い敬意を表し、作品のプレートが一番下に・・・

["Legs Caillebotte Gustave.1894"](#)(カイユボットによる遺贈)と記されている・・・

---

(以下・主要参考文献↓・注：一部本文中にリンクさせています)

オルセー美術館オフィシャルサイト | 2011年10月20日にリニューアルオープン

<http://www.musee-orsay.fr/>

オルセー美術館オフィシャルサイト | 2011年10月20日にリニューアルオープン | Collections

<http://www.musee-orsay.fr/fr/collections/bienvenue.html>

オルセー美術館の歩み

<http://www.museesdefrance.org/museum/special/backnumber/0612/special01.html>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/オルセー美術館>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/印象派>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ピエール＝オーギュスト・ルノワール>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/クロード・モネ>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アルフレッド・シスレー>

フレデリック・バジール Frédéric Bazille 1841-1870 | フランス | 印象派

[http://www.salvastyle.com/menu\\_impressionism/bazille.html](http://www.salvastyle.com/menu_impressionism/bazille.html)

シャルル・グレール

[http://www.allposters.co.jp/-st/Charles-Gleyre-Posters\\_c64847\\_.htm](http://www.allposters.co.jp/-st/Charles-Gleyre-Posters_c64847_.htm)

Première exposition de l'Impressionnisme

<http://www.impressionniste.net/>

Impressionnisme

<http://fr.wikipedia.org/wiki/Impressionnisme>

15 avril 1874 : Première exposition de l'Impressionnisme

<http://www.frenchinfluence.fr/article-15-avril-1874-premiere-exposition-de-l-impressionnisme-70755367.html>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/普仏戦争>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/フランス第三共和政>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/フランスの歴史>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/油絵具>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ナダール>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ウジェーヌ・ドラクロワ>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ドミニク・アングル>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/レオン・ボナ>

ギュスターヴ＝カイユボット : Gustave Caillebotte (1848-1894)

印象派を支え続けた、もうひとりの印象派・・・

<http://caillebotte.net/>

カイユボットコレクションには作品のそばにあるプレートが一番下に「Legs-Caillebotte-Gustave,1894」という風に書いてあります・・・

<http://caillebotte.net/blog/collection/page/4/>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ギユスターヴ・カイユボット>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ジュヌヴィリエ>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ジヴェルニー>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ペール・ラシェーズ墓地>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/遺贈>

(注意：PDFおよびePubではリンクしていない場合があります)

